

## 「第6回ミニ懇話会」開催報告

広大マスターズ広島 広報担当：渡邊 敏正

第6回ミニ懇話会が、岩崎文人先生（広島大学名誉教授、元教育学研究科・教育学部）を話題提供者として

『原子雲の下で—大田洋子・原民喜・栗原貞子・峠三吉—』

なるタイトルで開催され、聴取者は11名でした。これまでと同様に幹事会に引き続き開催され、幹事会に出席した7名の幹事以外に4名の参加がありました。今年度に加わられた有元会員と水羽会員、並びに広島大学大学院人間社会科学研究科の佐々木先生の3名の方たちに加えて、松水会員が元気なお姿を見せられました。このところ体調不良とお聞きしていただけに幹事一同にとっても大変喜ばしいことでした。会場のM302 講義室は比較的広めですが、若々しくて内に秘めた情熱が我々に伝わってくるような先生のお話ぶりは聞き手を話し手にグッと近づけ、実に有意義なミニ懇話会となりました（写真1）。

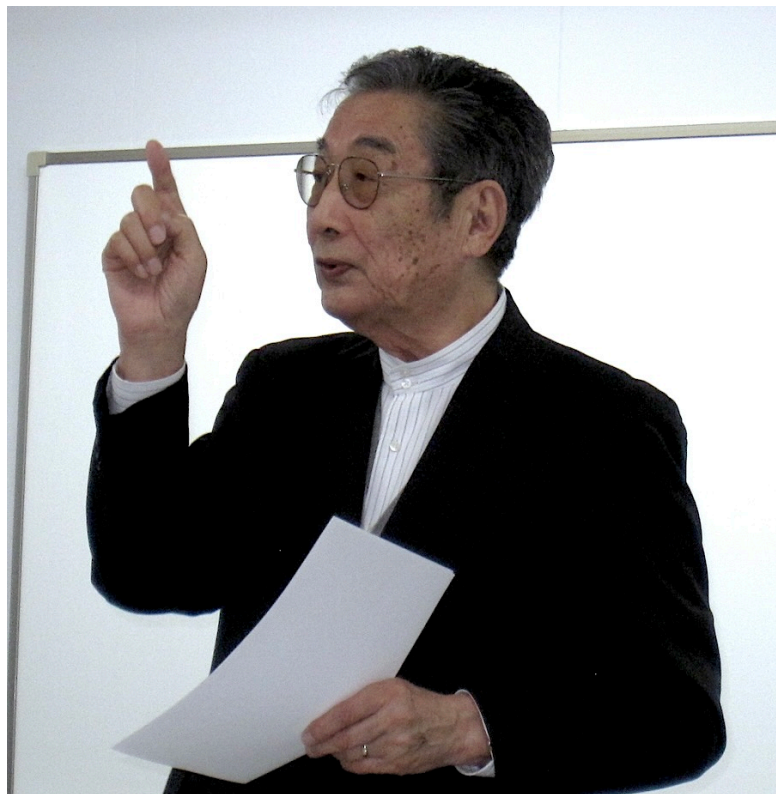


写真1：資料を手に説明中の岩崎先生

お話の詳しい内容と関連する解説については、有元会員が執筆して下さることになっておりますので、ここでは広報担当幹事として感想を交えた当日の概要を記述して、開催報告といたします。

話題の中心は、原爆文学とそれを支えた文学者たちでした。1945年8月6日の広島への原爆投下を起点として、その前後におけるこれら文学者の原爆文学との関わりおよび原爆文学の推移について、詳細な資料に基づいて解説をしてくださいました。「原爆文学」と

という言葉は当方には馴染みがなかったのですが、原爆がもたらした人類未曾有の悲惨を直接的にあるいは間接的に扱った文学作品の総称、という理解に基づいてお話を聞かせていただきました。

講話の始まりは、広島、長崎への原爆投下に関するアンケート結果の紹介とコメントでした。具体的には、NHKが2025年5月～6月に実施した「戦後80年に関する意識調査」において、広島県民と長崎県民それぞれについて無作為抽出した18歳以上の1800人を対象に原爆投下日を聞いた場合の正答率を紹介されました。広島県民の調査有効数は1097人で正答率が広島（8月6日）について97.6%、長崎（8月9日）について90.3%ということでした。ただ、投下の西暦年あるいは元号まで合わせて聞くと正答率低下が予想されているとも話されました。小中学生については同アンケート結果は未公開ですが、2015年公開の広島市教育委員会による同様の質問（ここでは広島投下の年月日を問う）に対しては、広島市の小学4～6年生および中学生の正答率がそれぞれ75%および78.3%ということでした。しかしながら、原爆がどこから運ばれてきたか、という質問になると根拠のない回答が殆どであったということを踏まえ、原爆投下対象がなぜ広島や長崎になったか、などについても合わせて事実を正確に伝える必要性を強調されました。このようなデータを知って当方は少なからずショックを受け、正答率は決して高くない、もっと知らせなければ、という思いが消えませんでした。さらに、1945年2月4日から8月6日までの原爆投下に向けた米英ソの動き、8月6日の午前0時37分から原爆炸裂の8時15分さらに午後1時58分までの米軍爆撃機エノラ・ゲイの動きについて、詳細なデータを提示しながら説明してくださいました。また、「原爆被害の初公開」なるタイトルで悲惨な被爆の実像を明らかにしたアサヒグラフの記事について雑誌の実物を示しながら紹介されました（写真2、写真3）。これらのこともアンケートに関するお話と共に強く印象に残っています。



写真2：回覧されたアサヒグラフ

原爆文学は、まず被爆した文学者によって作品が書かれ、その後、被爆はしていな



写真3：アサヒグラフを手にした岩崎先生



写真4：講演中の原民喜  
(回覧された写真)



写真5：回覧された峠三吉の詩集

いものの原爆の非人道的、非人間的な悲惨さに突き動かされた文学者による作品の出版が続き、一つのジャンルとして形作られたということでした。講話は、原民喜、峠三吉、大田洋子、栗原貞子などの原爆文学者に焦点が当てられました（写真4、写真5）。この方たちの生きた時代背景をベースに、被爆という現実の中で書かれた代表的な作品について、作品のポイントとなる記述部分と共に執筆の経緯や作品の持つ意義などが詳細に記述された縦書きの資料を作成・配布され、それに基づいて説明をされました。

また、GHQなどによる検閲という表現への抑圧があった時代における作品出版への影響の具体例として、検閲により作品自体の内容や体裁が全く別物になって世に出ることがあったこと、それを文学者自身の作品そのものと受け取った世間、など今では想像し難い状況があったことを話されました。さらに、これらの方々の文学碑についても写真が回覧され、お聞きした説明からこれらの方々の文学碑が当方の自宅のごく近いところにあることを知



写真6：栗原貞子文学碑の写真を手に  
説明中の岩崎先生



写真7：大田洋子文学碑

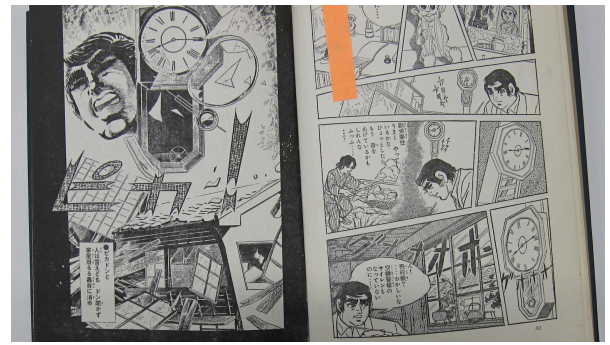


写真8：回覧された漫画  
「ある惑星の悲劇」のページ

り、広島で生まれ育った者として驚きと恥ずかしさが交錯しました（写真6、写真7）。原爆の悲惨さを表現したものとして文学作品以外にも記録・報道、絵画、映画・写真、漫画、歌曲などにも言及されました（写真8）。また、原爆文学とその時代背景を語るとき、戦争の被害者としての側面が強調される傾向にあるけれども加害者の側面も忘れてはならない、という指摘もされました。

懇話の終了後に、若年層を対象に原爆の怖さ、被爆の悲惨さを伝えようとする取組に関連して、『あまりの酷さに以後見たくない気持ちが強くなる、あるいはショックが大きすぎてトラウマになってしまう、という現実にはどのように対応すべきでしょうか』という質問が出ました。それに対して、先生は「原爆のあまりに酷い実像を最初から見せることは控えて、少しずつ徐々に原爆の怖さ、被爆の悲惨さの現実を説明していくことが有効な選択肢と思われる」と答えられました。反核・平和活動を推し進める際の一つの基本的な手順が示されており、心に留めておくべきことと考えています。

原爆文学とそれを支えた作家およびその作品を通して原爆の怖さや被爆の惨さを炙り出し、我々に反核・平和教育へのメッセージを示された、と捉えています。厚く御礼申し上げます。